

ハート・オブ・ゴールド



vol. 4

2000年9月4日発行

発行/編集 ハート・オブ・ゴールド事務局
本部 〒701-1213 岡山市西辛川872-2
T&F086-284-9700
メール:kukot@pc.haren.net.jp
東京 〒104-8001 東京都中央区銀座8-4-17
Tel:03-3575-5196 Fax:03-3575-5887

希望と勇気をわかつあうために 《ハート・オブ・ゴールド》



ハート・オブ・ゴールド
代表理事 有森 裕子

『Hearts of Gold』の会員のみなさま！
日頃より、いろいろな形での、『Hearts of Gold』に対する皆様からの心あたたまるご理解、ご参加、ありがとうございます。

『Hearts of Gold』も今年の10月10日で、立ち上げて3年目になります。

1年1年、年を追うごとに、いろいろな変化を、もちろん進展を見せてきています。特に、活動理解者・参加者が大人の方々だけでなく、子どもたちに広がってきている事一活動に参加する子どもたち、支援内容も子どもたちを支援する活動が始まりー違った意味でのすばらしい“自立”を支援する国際交流も始まっています。

私たちの合言葉である“できる人が、できる事を、できるだけ、できるかぎりしよう”的“できる人”がこのように幅を広げてきている事は、私たち『Hearts of Gold』にとって、とても大切な事と感じています。そして、これからも、この幅のある多くの皆様のアイデア・意見・♥を最大限に生かした活動をしていきたいと思っています。

会員の皆様およびご支援いただいている皆様、今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします。

卷頭の辞

理事長 萩原 隆



JMJA
日本医師ジョガーズ

ハート・オブ・ゴールド Hearts of Gold は『スポーツを通じて、国境、人種、ハンディキャップを越えて、希望と勇気の共有を実現』することを目指して1998年10月10日発足したNGO組織です。活動分野・内容のうち主なものはアンコールワット国際ハーフマラソン運営協力とカンボジア対人地雷犠牲者への義足寄付（ランナーズエイドの促進）でしょう。

ランナーズエイドとは1994年から始められたもので、全国各地の市民マラソン大会に呼びかけてランナー参加費の一部を開発途上国での義肢製造にあてようという募金運動のこと。先進諸国ではほぼ制圧されたポリオは開発途上国では200万人の子供が罹患。彼らには早期に装具を装着させれば歩行可能となるのです。全世界のハンセン氏病（癪）患者1,200万人の10%が靴型装具を必要としています。カンボジアでは内戦の結果、対人地雷で四肢を失った人たちが特に多く、同国はいまなお未処置地雷の問題をかかえています。現在世界中の四肢切断者500万人のうち350万人がアジアに居住し、3~4年ごとに義肢を交換しなければなりませんが、日本の製品は高価過ぎるので現地生産でゆくしかない…兵庫県立リハビリテーションセンター所長・沢村誠志ドクターの『アジア義肢装具センター』構想とは、そのための工場、機械と人材養成プランのことです。

今日ランナーズエイドは西日本各地の大会で定着してきました。平成4年3月神戸湾岸高速道完成記念『ハイウェーラン』も、高石ともや氏が実施した義士ラン（義肢⇒義士にヒントを得たもの）もまたそのひとつでした。このような間接募金ではなく、カンボジア国内でマラソン大会は実施できないのか？マカオでの七者会談（サンケイ社から4名、カンボジアから3名）はこのような発想から生まれたものでした。翌1996年4月23日~27日サンススポ社から3名が実情調査のため現地入りしたのですが、自動小銃を手にした兵士が付き添う物々しさだったとか。はたして安全な大会が保障されるだろうか？最終的に当局から『国家行事として実施する』旨の誓約があつて1996.12.22. 第一回アンコールワット大会開催の運びとなりました。この大会は其の後、クーデター騒ぎにもかかわらず続けられ今日に至っています。

私達は以上のような幾多先達の御苦労の足跡を継いで歩み始めたばかりで、まだ弱体な組織に過ぎません。どうか皆様各位の善意とお力を貸し下さい。

私達は走れる喜びをひとびとと分かち合いたい…不幸な人にはわずかでも援助してあげたいと念願しております。組織の名付けの親ローレンモラー（本会副代表理事）は『心の金メダル』について書いています。

「金メダルとは（競技に勝って得られるのでなく）人の心のシンボル、人が他人に寄せるやさしさではないか…この世界は、まぎれもなく、困難に直面していますが、その解決を任せにしておいてはいけない…ひとりひとりが人間として行動すれば、すこしあは役に立つことができるはずです…」

そして次の言葉で結んでいます。

「誰でも、金メダルを得ることはできます。それを求めようとする心さえあれば。」



お問い合わせは・ご質問は
TEL 03-5651-0961
FAX 03-3661-2103

ハート・オブ・ゴールド理事

名誉顧問 櫻内 義雄	元衆議院議長
代表理事 有森 裕子	マラソンランナー
副代表理事 ローレン・モラー	バルセロナ五輪銀、アトランタ五輪銅メダリスト マラソンランナー、バルセロナ五輪銅メダリスト
理事長 萩原 隆	五輪4大会連続出場、ニュージーランド 日本医師ジョガーズ連盟事務局長
副理事長 緒方由美子	国際人権ネットワーク代表
理事 君原 健二	九州女子短期大学教授、メキシコ五輪銀メダリスト
理事 高石 ともや	フォークシンガー、マラソンランナー
理事 増田 明美	スポーツライター、ロサンゼルス五輪出場
理事 松村 政子	マラソンランナー、吹田中の島ランナーズ代表
理事 山本 佳子	ランナー、92年ボストンマラソン2位
監事 相川 光生	MAP総合会計事務所代表取締役

アンコールワット国際ハーフマラソン 2000 12/2-3

ハート・オブ・ゴールド 2000年の活動（一部予定）

■啓発研修事業

- ・1.13 「カンボジアの子ども達」平福小学校にて出張授業
- ・2.24 国際交流研修会
「世界を貫く熱い想い—1人1人の力が合わさるとき—」
- ・3.3 国際ボランティア体験報告会
- ・3.4 千里・ランニングセミナー「あなたも心の金メダリスト」
- ・3.7 東京・スポーツと人道援助を考えるシンポジウム開催
- ・5.20 北海道・ハートフルトーク「心の金メダルに向かって」
- ・7.19 「国際理解と協力（カンボジア）」岡北中学校にて説明会
- ・7.27 「ハート・オブ・ゴールドの活動とカンボジアについて」
後楽館中・高校にて講演
- ・9.30 地球市民ふれあいセミナー
- ・11.18 埼玉「夢創造事業講演会」坂戸中学校

■主催・後援・協力スポーツイベント

- ・1.23 高槻シティ国際ハーフマラソン
- ・2.6 伊東オレンジビーチマラソン
- ・2.13 神戸バレンタインデー・ラブラン
- ・3.5 千里国際チャリティーラン
- ・4.16 霞ヶ浦マラソン
- ・4.16 四日市・さくらとお茶マラソン
- ・5.21 ラニング・オン・SAPPORO
- ・5.28 ボンドカップ東京ドラゴンボート2000
- ・5.28 西宮国際ハーフマラソン
- ・5.28 としまえんチャリティアクアスロン大会
- ・6.11 兵庫・みかた残酷マラソン全国大会
- ・7.23 天神祭奉納ボンドカップ2000日本国際龍舟選手権大会
- ・9.24 吹田中の島 耐久5時間走大会
- ・10.29 神戸ハロウィンラン
- ・11.12 岐阜・いびがわマラソン
- ・11.26 河口湖マラソン
- ・12.3 第5回アンコールワット国際ハーフマラソン
(義手義足支援金寄付)

ハート・オブ・ゴールドの活動に参加して



モンゴルの孤児と

私がハート・オブ・ゴールドの存在を知ったのは忘れもしない—昨年の10月、設立発表翌日の小さな新聞記事でした。ちょうど別の団体で海外への支援事業を計画していた折りでもありましたので、どのような活動をされるのか非常に興味がありました。

その後縁あって有森さんにお会いし、Tシャツやキャップの購入を仲間に勧めたり、また「My Project」をやってみたりと、知らず知らずのうちにハート・オブ・ゴールドの活動に参加するようになったわけですが、振り返ってみると「誰でも簡単に参加できる」ことをごく自然にやってきたよう思います。

世界中には本当にいろいろな問題があって、それを解決するには気の遠くなるような時間と努力が必要ですし、いま我々がやっていることは、言ってみれば砂漠に水をまくようなものかもしれません。しかし誰かが先頭に立って一步を踏み出すことの大切さを、ハート・オブ・ゴールドの活動に参加してつくづく実感しています。

これからはこうした仲間を増やすこと、輪を広げていくことに力を注いでいきたいと思います。私の小さな子どもも応援しています。

下村 直資（名古屋市）

■その他協力企画

- ・3.4～12 広島・NGOフェア2000（パネル展）
- ・4.20～26 代表理事有森裕子カンボジア訪問
- ・8.19 日本テレビ「24時間TV、愛は地球を救う！」放映
- ・11.2～5 センターエース チャリティバザー コンベックス岡山
- ・12.10 「ハート・オブ・ゴールド」スペシャルJALホノルル
マラソンツアー（旅行主催：近畿日本ツーリスト）
- ・時期未定 アシックス「ハート・オブ・ゴールド」キャンペーン

■自立支援活動

- 1、農民に対する野菜栽培技術指導

2000年6月から2001年5月まで、郵政省国際ボランティア貯金配分金事業として、カンボジアの気候にあった比較的容易に生産できる野菜の栽培技術移転を行う。地域の貧困者（特に孤児）が専門技術と将来的な収入源を確保し、自立に繋げることを目的とする。

- 2、「マイプロジェクト」（自立支援活動）

（1）個人・団体

開発途上国（本年はカンボジア）に援助する人に、現地でどのように自分たちの支援金や物が使われたかを報告し、援助活動の実態を知ってもらう。

（2）日本の子どもたちとカンボジアの子どもたちとの交流を通じて国際理解を深めると共に学校がボランティア活動に参加し、実際に支援活動を始めるためのコーディネイトをする。現在7校が参加。

■スタディツアーハート

実際に現地を見学し、交流することにより貧困・環境・平和などの問題について理解を深める。それぞれのグループの目的に応じたツアーパートを提供。体験ボランティアも可能。（ほぼ毎月実施）2000年1月から8月まで9回実施（23人参加）10、12、2、3月実施予定。

■障害者スポーツの振興

カンボジア身障者陸上連盟協力（バラリンピックへ向けてトレーニング中の選手たちのトレーニングルームに大鏡を設置）

■ランナーズ・エイド

義足支援のため、マラソン大会、イベント会場にて「オリジナルTシャツ、キャップ、ジャンバー等のグッズ」販売

カンボジア・スタディツアーハート

「国際ボランティアの理念と実際」という授業をとり「NGOフィールド体験カンボジア・スタディツアーハート」に参加し、カンボジアに行くことができて、本当に良かったと思っている。

自分の中で一番印象に残った出来事は、スナダイ・クマエでの交流プログラムである。これは実際カンボジアに足を踏み入れる前から、ツアーハートに参加するメンバーたちと、現地でどのようなことをするかなど、さまざまな計画を立て、準備をしていたため、特に印象深いものであった。またカンボジアに来て、本当の意味でボランティア体験することのできる唯一のものであったという理由からもある。この孤児院で子どもたちが私たちと次第に打ち解けていき、子どもたちの笑顔を何度も見ることができたのが最高にうれしかった。事前に計画をしていたことが、子どもたちにすべて受け入れてもらうことができて、本当にここに来てボランティア体験することの意味があつたと思う。

このカンボジア・スタディツアーハートから学んだことは数しれない。虐殺現場や強制収容所跡地では、過去のカンボジアの状況を知ることになり、義足センター、ゴミ集積場、母子衛生教育、地域医療支援の現場では、今のカンボジアの現状を実際に見ることもできた。また、それぞれの場所で、さまざまな分野で活躍している方々にもお話をうかがうことができ、今後のボランティア活動のあり方や、ボランティアをすることの意義を学ぶことになった。

カンボジアで実際に得たもの、見てきたものを胸に抱いて、一年後、再びカンボジアを行ったとき、もっと多くの人々と交流することができ、ボランティア体験がより充実したものになるよう、これから自分なりにがんばっていくつもりである。（ノートルダム清心女子大学 Y.F）

■岡山市立吉備小学校 PTA の支援活動

(山陽新聞 2000年7月16日から)

学校との交流

■岡山市立吉備小学校 PTA の支援活動
カンボジアの養護施設「スナーダイ・クマエ」
で給食を作る子供たち (ハート・オブ・ゴールド提供)



岡山・吉備小PTA

岡山市立吉備小学校（同市庭瀬）のPTAが、カンボジア北東の都市シエムリアップにある養護施設「スナーダイ・クマエ」に給食設備一式を贈ることになり、十九日の一学期終業式で全校児童に報告する。

同養護施設は、約二十人の子供たちが自分たちで給食を作っているが、水やガスなどの設備がそろっていない。調理器具も不足している。

同小PTAは、岡山市出身のランナー・有森裕さんが代表を務めるNGO（非政府組織）の「ハート・オブ・ゴールド」（本部・同市西幸川）を通じて現状を知り、国際協力や子供たちの国際交流のきっかけなど、水道ポンプやガスレ

ガスレンジやⅢ NGO通じ来月贈る



ボランティア活動に参加した学生たち。食事の味は格別



義足装着・歩行訓練の様子



「スナーダイ・クマエ」
孤児院の元気な子どもたち



日本語授業風景



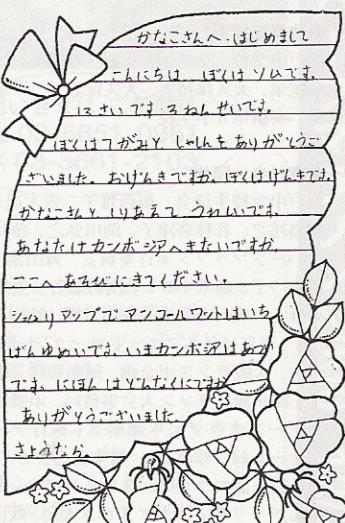
カンボジア身障者
連への協力ート
レーニングルーム
に鏡を寄贈

ンジ、皿などの調理器具一式の費用約五十万円を贈ることにした。費用は、会員から長年バザーなどで得た積立金を充てることを五月の総会で決意した。「ハート・オブ・ゴールド」の活動に参加しているノートルダム清心女子大四年の大関幸子さん(三島ら)など

三人が八月に現地に持参し、一ヵ月間にわたって同養護施設の様子をビデオに記録して吉備小の児童に報告する。

国富修身PTA会長(西田)

「同市平野」は「養護施設の子供たちが元気に成長することとともに、子供たちが主役になって交流の輪を広げてほしい」と話している。



■交流している日本の学校へ
「スナーダイ・クマエ」のソム君から届いた手紙